

小児科診療 UP-to-DATE

2022年7月26日放送

AYA 世代に発症するがんとその対策

国立国際医療研究センター がん総合診療センター 乳腺腫瘍内科
科長 清水 千佳子

AYA 世代とは

医療従事者の皆さんは最近、AYA 世代という言葉を目にする機会が増えてきているのではないのでしょうか？ AYA 世代とは、英語の Adolescent and Young Adult の頭文字 AYA を取った言葉で、日本語で言うと思春期・若年成人のことを指します。思春期・若年成人には明確な定義があるわけではなく、国や団体、文脈によって様々な定義で使われています。

例えば、がんの領域ではオーストラリアの若年がんの対策では 12 歳～25 歳。カナダのがん学会では、15 歳～29 歳。アメリカの国立がん研究所では、15 歳～39 歳を AYA 世代としています。

我が国のがん対策は、医療費、教育、介護などの制度の側面から支援が行き届いていない

と考えられる 15 歳～39 歳を AYA 世代として実態調査が行われました。そして、その調査の結果を基にがん対策は計画されてきています。ですが、具体的な対策は、15 歳未満や 40 歳以上の方を含む場合もあります。

AYA世代 Adolescent and Young Adult

▶ 明確な定義はない

オーストラリア	若年がん対策	12～25歳
カナダ	がん学会	15～29歳
アメリカ	国立がん研究所	15～39歳

日本のがん対策 15歳～39歳

医療費、教育、介護などの制度の側面から支援が行き届いていないと考えられる15歳～39歳をAYA世代として行った実態調査の結果を基に対策を推進

AYA 世代のがん患者数

さて、AYA 世代を 15 歳～39 歳とするとき、実際、この世代にどれぐらいのがんの患者さんがいると思われますか？ 全国がん登録によると、最近では年間に 100 万人近い方が新しくがんと診断されているわけですが、その中に AYA 世代で診断される人は 2 万人～3 万人と推定されてい

ます。15歳未満の小児がんが年間2,000人程度ですので、AYA世代のがんはその10倍ほどになりますが、がん患者全体からみると、数%に過ぎず、若い患者さん特有のニーズが見逃されやすいというのが、医療や支援の問題の根底にあります。

さらに、今更とAYA世代のがんと表現していますが、AYAがんというがんがあるわけではありません。実際にAYA世代のがんの種類は非常に多様です。20歳前半くらいまでは白血病やリンパ腫といった血液の腫瘍、骨軟部腫瘍や性腺腫瘍、甲状腺がんといった、いわゆる稀少がんで9割を占めます。これらのがんは、世代を問わず、一定数の罹患があるわけですが、20代に入ると子宮頸癌や乳癌、30代では胃がん、大腸がん、肺がんなど、いわゆる成人の5大がんに含まれるような一部の癌も入ってきて、これらのがんが半数以上を占めるようになってきます。

このようにAYA世代のがんは稀少で多様だけでなく、さらに病期が異なれば治療の内容も異なります。患者さんの発達の度合いや、社会的なバックグラウンドまで考えると本当に多様です。患者さんのニーズは非常に個別性が高いと言えます。

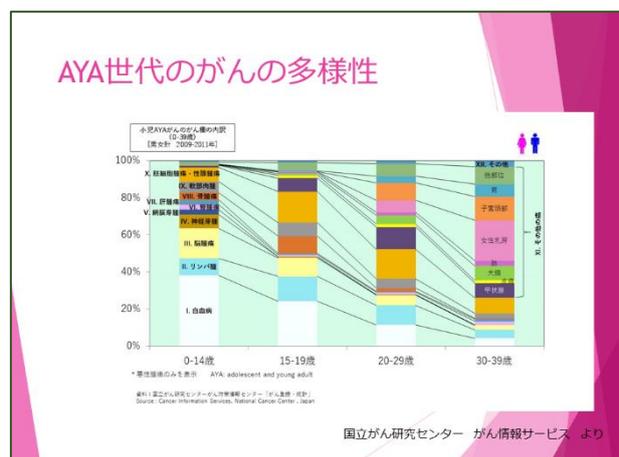
AYA世代のがんの予後

では、AYA世代のがんの予後はどうでしょうか？ 昨年、大阪国際がんセンターの中田佳世先生が報告された大阪府のがん登録によると、1980年前後には30%であった5年生存率がこの30年くらいの間に約80%にまで改善してきています。

がんの種類別にみると、がんによって予後の違いが見られ、中枢神経系の腫瘍や消化器のがん、呼吸器のがんなどは、5年生存率が70%にも達しません。こうした予後が悪い腫瘍においては、がんの予防や早期発見、治療の手だての進歩が期待されることです。特に小児・成人で共通にみられるがん種については、小児科と成人の診療科で治療開発が別々に行われてきて、治療成績が異なるということも問題として認識されており、小児科と成人診療科の診療や研究の連携の重要性が認識されてきています。

また、5年生存率80%という数字の中には、がん以外の原因、つまり治療の晩期合併症などで命を落とされる方も含まれています。がんの治療後も長く生きられる方が増えてきている分、がんの治療後の健康管理にも目を向ける必要があります。

実際、AYA世代のがん経験者は、がん以外の疾患で亡くなるリスクが、がんを経験してないAYA



世代の人よりも約2倍高いことが報告されています。中でも感染症や心血管疾患による死亡リスクはそれぞれ5倍、2.4倍と報告されています。

AYA世代のがんの支援

さて、ここからはAYA世代のがんの支援の課題についてお話をしていきたいと思います。先ほど申し上げたように、AYA世代のがんの患者さんは少なく、全国各地の医療機関に散らばって治療を受けておられます。全国に400余ある地域がん診療連携拠点病院を対象とした調査では、1つの拠点病院で1年間に診療を行った15歳～19歳の患者さんの中央値は、わずか2例でした。AYA世代でも患者さんが多い30歳～39歳の患者さんの診療数も中央値は22人にすぎません。これを医療従事者、一人当たりで計算すると、AYA世代の患者さんには年に1回も出会ったことがないという人も出てくると思います。病院の中で患者さんも孤立しやすいですが、医療従事者も若い患者さんを目の前にどのように接したらよいか分からないと戸惑うわけです。

そしてAYA世代の患者さんは、体の健康のことだけでなく、心理的な問題や妊娠性のこと、教育や学業、介護の問題など、今の生活や将来のことに対して、様々な悩みや不安を抱えています。しかし、そうした多様なニーズに対して、専門的に対応に当たれる人材が必ずしも病院にいるとは限りません。こうした

AYA世代のがん患者さんに関する知恵や経験がなかなか蓄積していきにくい構造の中で、医療従事者が場当たりの対応にならないようにするには、つまり、患者さんにとって必要な情報や支援がきちんと患者さんに届くようにするにはどうしたらよいのでしょうか？ AYA世代のがんの稀少性・多様性を考えると、様々な専門性を持った多職種の連携が大切であることは言うまでもありません。患者さんの悩み事は人それぞれですので、まずは現場の誰かが個々の患者さんのニーズを評価して、そのニーズに応じて専門性の高い職種につないでいくということが大事になります。患者さんが必要とする資源が病院の中になく場合には、地域や最近ではオンラインで全国につながることも容易になってきましたので、そうした院外のリソースを活用していく工夫が必要だと思います。また、リソース同士が連携してネットワークを作っていくことも必要です。

私は今、AYAがんの医療と支援のあり方研究会、通称AYA研というAYA世代のがんに問題意識を持つ人たちが集まる団体の理事長をしています。AYA研ではAYA世代のがんの情報や経験を蓄積して、困っている患者・医療者・支援者のハブの役割を果たしたいと考えています。医療機関では、こうしたAYAのネットワークと連携する窓口を用意していただいて、その窓口の存在を患者さんに伝えていただきたいと思います。

何より大事なことは、医療従事者がよく分からないから、忙しいから、と若い患者さんをスルーしないこと。当たり前なのですが、診療の現場で、患者さん目線で困っていることはないか、心

AYAの医療と支援の向上のために

- ▶ AYAのニーズに関して、担当医等医療機関の医療者が十分に認識することが支援への第一歩であり、医療者教育が重要である。
- ▶ AYAの予後の改善のために、診療科の壁を越えた連携や、長期的な健康管理の体制を確保する必要がある。
- ▶ AYAの支援には専門的な対応が求められる。施設のなかに各種ニーズを拾い上げ、専門的な対応につなげる「AYA支援チーム」を構築し、多職種でAYAの診療・支援の充実を図ることが求められる。
- ▶ AYAのニーズは、既存の制度・リソースの活用によって支援しうるものが少なくない。がん治療にあたる医療機関における相談窓口を明確にするとともに、地域における支援のネットワークを構築し、組織や専門の壁を越えた弾力的な連携を行うことで、既存の制度・リソースを有効に活用していくことが期待される。

配なことではないかと気にかけていただきたいということです。あまり難しく考える必要はありません。皆さんの中には AYA 世代の人もいらっしゃるでしょうし、もう AYA 世代はとうに終わったという人もいらっしゃるかもしれません。ぜひご自身が AYA 世代だった時のことを思い出してください。

AYA 世代は人生の中でも一番忙しくて、プライベートでも社会的にも変化の多い時期です。そんな時がんと診断されたらと患者さんの気持ちを想像して、そして自分の経験に基づく先入観や価値観を押し付けないようにしながら、患者さんのニーズを引き出すことが、AYA 世代の支援の第一歩だと思います。患者さんはがんと診断された時に、今まで生きてきた社会から隔絶されて、将来の夢を絶たれ、とても孤独な気持ちになると言います。患者さんの生きづらさは、社会のがんに対する無知や先入観によるところも少なくありません。

私たちの AYA 研では、AYA 世代のがんの支援に当たる様々な団体の人たちと共同で、毎年 3 月に AYA week という啓発週間を開催し、AYA 世代のがんに関する様々な発信を行っています。また、来年 5 月には、第 5 回となる学術集会を開催します。是非、本日 AYA 世代のがんとその課題について知っていただいたリスナーの皆様には、AYA week や学術集会でさらに AYA 世代のがんについて学びを深めて、私たちのネットワークに参加していただけるといいなと思っています。患者さんの予後とサバイバーシップの向上のためにコラボレーションをしていただけると幸いです。

AYAがんの医療と支援のあり方研究会

第5回	AYAがんの医療と支援のあり方研究会学術集会
会期	2023年5月13日（土）～5月14日（日）
テーマ	Co-Creation –対話からはじめる共創–
会場	昭和大学上條記念館

AYAweek 2022

2022年3月5日（日）～3月13日（日）
AYA世代のがんの今を知ろう。
日本全国で「つながる」「たのしむ」「学ぶ」1週間。

「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>